

*The regenerated Japanese Society of Inflammation**Sei-itsu Murota**

再生なった日本炎症学会

室 田 誠 逸 *

過去において、日本炎症学会はその時々の特ピックスをたくみに取り込んで発展してきました。PGをはじめとするアラキドン酸代謝物しかり、活性酸素、サイトカイン、血管内皮細胞、NO、接着分子、MMP、ケモカインしかりであります。勉強になる学会と評判になり、毎年1,000名を超す参加者でにぎわっていました。大学や企業の研究室からは何名かずつが連れ立って会場に姿を現していました。しかし、世の中が不景気になるにつれ、学会参加者の数がしだいに絞り込まれ、その減少傾向には歯止めがかからない状態が続きました。その時、21世紀の医療と目される再生医学が突如として登場しました。日本炎症学会幹部はこの再生医学の重要性と将来性をいち早く認識し、これを取り込むことによって、学会自身の脱皮と再生を図ることにいたしました。今から4年ほど前のことであります。

学会の名称を日本炎症・再生医学会と改名し、このたび改名後第3回目にあたる学会が、中畑龍俊会長のもと盛大に行われました。私とそのプログラム予稿集を拝見して、まず大変うれしく思い、感激いたしましたことは、一般演題の数が、前回、前々回に比して倍近くに増えていたことと、その増えた分はすべて再生医学に関する演題で占められていたことであります。これは中畑会長のご努力のたまものであることは言うまでもないことですが、私はその背景に、3年目にしようやく再生医学に関する興味と関心が本学会会員の方々に深く浸透し、その研究成果がようやく出始めたことがあるのではないかと考えました。これまでシンポジウムやワークショップ等では炎症系と再生医学系の演題数は意図的に1:1になるように企画されてきました。しかし、学会の中核をなす一般演題に関しては、その比率を意図的に操作することは不可能であります。前回、前々回とも一般演題における再生医学の比率はわずかに20%未満でありました。しかし今回は、一気に一般演題においてもその比率は1:1に近づいており、まさに理想的な状態になっておりました。

日本炎症・再生医学会と改称した当初は、一見、無関係に見える炎症学と再生医学を単に機械的に接ぎ木しただけではすぐ折れてしまう、と危ぐする声も聞かれました。しかし、私は今回の学会に参加して、改めてこの接ぎ木は完全に成功し、そこには将来大きな果実が実る可能性が秘められていると確信いたしました。よくよく考えてみますと、両学問分野は本来むしろ互いに密接にかかわり合っている領域だったのではないのでしょうか。すなわち、再生医学の分野で臓器移植を行った場合を考えてみますと、移植直後から免疫と炎症の問題を克服しなければ、その移植は失敗に終わってしまうはずで、そこでは炎症担当細胞やサイトカインなどに関する深い知識が不可欠です。逆に炎症分野ではその最終過程において必ず組織の再生が付きまとい、今回の学会の発表を拝聴して、私は炎

*President of the Japanese Society of Inflammation and Regeneration
日本炎症・再生医学会理事長

症と再生医学の両分野の研究者が互いに刺激し合いながら、互いに向上している場面に何度も遭遇いたしました。また、両分野間で共同研究がいくつも芽生えているともうかがいました。今や本学会において、両分野は完全に融合しあって、理想的な方向へ進んでいるように思われます。今回の学会で、私は主として再生医学系の会場を廻りましたが、どの会場も活気にあふれておりました。再生医学の基礎研究ならびに臨床研究において、わが国が世界のトップレベルにあることを改めて強く感じました。今回の学会の参加者総数は950名を超えたそうで、栄光の昔に近づきつつあります。大変喜ばしい限りであります。いまや再生医学は市民権を得て、全国レベルでその研究が急展開しております。半年前に神戸で開かれた第2回日本再生医療学会においてそのことを痛感いたしました。この学会は臨床系が中心でしたが、会場は熱気ムンムンで、日本もついに再生医学の時代に突入したなという感がありました。

日本炎症・再生医学会は、これまで培ってきた炎症学の基盤の上に立って、再生医学の基礎研究を中心として発展してゆくべきでありましょう。今年は新しいルールの下で理事選挙が行われます。再生医学系の理事の数が増える見込みであります。再生医学は、わが国の周りだけでも、中国、韓国、台湾などがいずれも国家的プロジェクトとして取り上げ、全力を挙げて取り組んでいます。再生医学・再生医療分野において、高い潜在能力を持つわが国が、これらの周辺諸国に負けることなく、将来この領域で世界をリードする国になってほしいと願っております。そのために日本炎症・再生医学会が少しでもお役に立てば幸いです。